



写真：井手口恵子

## William M. Siu

### ウィリアム・M・スー

1980年 インテルコーポレーション入社以降、さまざまな事業部でエンジニアリングおよびマネジメント職を歴任後、マイクロプロセッサ製品事業本部 副社長 兼 パフォーマンス・マイクロプロセッサ事業部長に就任  
2001年 現職に就任  
現在にいたる

インテルは、ブロードバンド、ワイヤレス、デジタルコンテンツ、そして、パソコンの機能によって実現されるデジタルホームを提唱している。果たして、デジタルホームによって、我々の生活はどう変わるのか。このほど来日した米インテルのウィリアム・スー副社長に、同社が掲げるデジタルホーム戦略を聞いた。

インテルが提唱するデジタルホームとは、何年後の世界を表現しているのですか？

スー これは、将来を示したものではありません。もつすでに起きていることなんです。家庭の中で、パソコンとビデオ、オーディオ機器を、ワイヤレス技術などで結んで、好きな時間に、家の

中の好きな場所で、好きなコンテンツを見ることができるよう。例えば、私の母親はかなり高齢となり、足も不自由している。しかし、デジタルホームの実現によって、PCカメラで撮影した表情をみながらコミュニケーションを行ったり、健康状態をモニタリングしたりといったことができる。また映画を手軽に楽しんだり、高品位の音楽を聞いたりといった、これまで体験できなかったようなさまざまなことが実現されるようになる。とくに、日本はブロードバンドの普及では先進国ですから、秋葉原で売られている製品を組み合わせることでデジタルホームを実現することができそうです。しかし、これを実現するには、今はちょっとした努力が必要だったり、専門知識が必要だったりする。残念なのは、まだ一般化したものではないという点ですね。それを解決するための努力がこれから必要です。

デジタルホームの最終的な形というのはあるのですか？

スー それはありませんね。パソコンが常に進化を遂げているように、デジタルホームの形も進化を続けます。ただ、その進化にはいくつかの段階があります。今は、当社やソニーなど約1

00社が参加しているデジタルホームネットワークキンググループ（DHWG）で、デジタルホームに必要とされる規格を策定していますが、このガイドラインが今年6月に出て、これを元にした製品が各社から登場することになる。また、当社では、エンターテインメントPCというリアレンスモデルを提示していますが、これを元に、今年末までには、各社からデジタルホームをターゲットとした機器が登場することになります。これが第1フェーズということになります。

デジタルホームを加速させるきっかけは何でしょうか。

スー 技術の進化が大きな意味を持ちます。インテルは、今四半期にAndarwoodと呼ばれるチップセットを出しますが、これによってハイパースレッディング技術を搭載したペンティアム4の威力がさらに発揮されるようになり、マルチメディアや高度なアプリケーション利用にも最適な環境が提供できるようになる。また、Grantsdaleによって、高品位ビデオの再生などに適した環境が実現されるとともに、7・1chのハイディフィニション・オーディオも、パソコンでシアター品質のサウンドを可能にする。

デジタルホームは将来のコンセプトではなく、もつすでに起きていることなんです



# デジタルホームは家庭を大きく変える 技術の進化が一気に普及を加速

米インテル コーポレーション  
副社長兼デスクトップ・プラットフォーム事業本部長 **ウィリアム・M・スー**

当然、無線LANによるインフラもデジタルホームを加速させることになる。こうした技術を採用した製品が数社から出始めると、追従するように各社から同様の技術を搭載した製品が出始め、デジタルホームの進展にも一気に加速がつくようになると思います。

**インテルが提示するエンターテイメントPCも進化を遂げると。**

スー そうですね。エンターテイメントPCの次のバージョンは当然考えられます。来年のIDF（インテル・デベロッパ・フォーラム）では、次のリファレンスモデルを提示できると思います。どんな形になるのかは、まだ言えませんが（笑）

**リビングの主権を巡って、家電メーカーとパソコンメーカーとの争いが激しくなっています。この点をどう見ていますか？**

スー 今は、そうした議論があります。2、3年もすれば、パソコンが、家電か、といった議論はなくなると思っていますよ。というのも、どちらも同じような機能を搭載していますし、その差がますます無くなっていく。議論が必要なくなるんです。

**しかし、家電メーカーは、必要以上に「ノンPC」という言葉を使っていますか？**

スー 家電メーカーには、使いやすいブックエンドファイルという点で大きな優位性がある。そしてパソコンに

は、インターネットやブロードバンド、拡張性といった点での優位性があるといえます。我々は、家電メーカーがもつ優位性を学んでいく必要があると思います。一方、ソニーや松下のように、家電にもパソコンにも強いメーカーは、自らの技術やノウハウをベースにこの分野に取り組んでいくでしょう。パソコンメーカーでも富士通のようにテレビ機能を搭載したパソコンを



4月7日、8日に開催された、インテルデベロッパ・フォーラムJapan Spring 2004。スー副社長は、デジタルホームとデスクトップテクノロジーについて、約1時間の基調講演を行った

投入しはじめています。日本では家電メーカーが強いですが、少しの期間は競争が激しくなることがあるかもしれませんが。ただ、最終的には、そんな議論はなくなっていくと思います。

**インテルのデジタルホームのデモストレーションでは、Windows XPメディアセンターエディションを中心としたものになっていますか？**

スー メディアセンターエディションは、まだまだ進化を続けるものであり、

今後も機能を拡張していかなくてはならないでしょうね。しかし、その一方で自らの技術によって、デジタルホームを実現する機器を投入可能な企業もあるでしょうし、LinuxなどのほかのOSにおいても、デジタルホームを実現できるでしょう。デジタルホームは、OSを限定するものではありませんし、異なるOSでも相互に接続することが必要なんです。その実現に対して、我々は強力に支援する考えです。

## 取材を終えて

今回の取材は、千葉県・舞浜で開催されたIDF Jの会場で行なった。スー副社長は約1時間の基調講演終了後、取材の部屋まで歩きながらテレビ局の撮影をこなし、その後本誌の1時間の取材。さらに、もう一本取材をこなした後に、記者会見に臨み、終了するやいなや香港に移動するために成田に向かった。この間わずか4時間。分刻みのスケジュールをこなすバイタリティーには驚くばかりだ。そのスー副社長はデジタルホームの早期実現に自信を見せる。そして、この世界を実現することが、今のインテルにとっては重要な課題だと断言する。どうも、スー副社長自らが、デジタルホームの実践者であることが、早期実現への自信を深めることにもつながっているようだ。

【インタビュー略歴】大河原克行のおおかわら・かつゆき 1965年、東京都出身。IT業界専門紙、BCN（ビジネス・コンピュータ・ニュース）で編集長を務める。IT産業を中心に幅広く取材。執筆活動を続ける。近著に「松下電器変革への挑戦」（宝島社刊）。